

# 竹の前遺跡発掘調査報告書

—平成26年度 姫路市手栢字竹ノ前158番地1他における発掘調査報告—



調査地（北西から）

2014

姫路市教育委員会

## 1. 調査に至る経緯・経過

姫路市手柄字竹ノ前158番1、同字浜田345番1において株式会社N T Tファシリティーズによる店舗の建設工事が計画された(図1・2)。対象地の一部は竹の前遺跡(県遺跡番号020435)に該当するため、平成26年(2014年)5月13日・14日に試掘・確認調査(調査番号20140076)を実施した。この結果、竹の前遺跡の範囲内及びその北側でも遺構が確認された。その後、開発主体者と協議を重ねた結果、建設計画の変更は困難との結論に至り、建築物の基礎部分を対象に本発掘調査(調査番号20140190)を実施する運びとなった。調査期間は平成26年(2014年)7月17日～24日、調査面積は101.32㎡である。現地調査終了後、出土品等の整理事業を開始し、本書の刊行をもって完了した。

調査体制は以下のとおりである。

### 調査組織

#### 姫路市教育委員会

教育長	中杉隆夫
教育次長	林 尚秀
生涯学習部長	小林直樹
文化財課長	福永明彦
文化財課係長	大谷輝彦(調整)

### 調査機関

#### 姫路市埋蔵文化財センター

館長	秋枝 芳
係長	岡崎政俊(事務)
同	森 恒裕(調整)
技術主任	福井 優(試掘・確認調査)
同	南 憲和(本発掘調査・整理)
主事	小林啓佑(事務)

## 2. 調査の概要

調査区は、建築物の基礎部分を対象に22箇所(1～22区)に設定した。調査地の基本層序は、地表から約1mの現代の盛土、約15cmの耕土、約5～10cmの暗灰黄色シルト質細砂(遺物包含層)が存在し、明黄褐色シルト質粘土(基盤層)が標高5.7mで認められた(図3)。3～14・18・19区では暗灰黄色シルト質細砂と基盤層の間に明黄褐色粘質土が介在してい

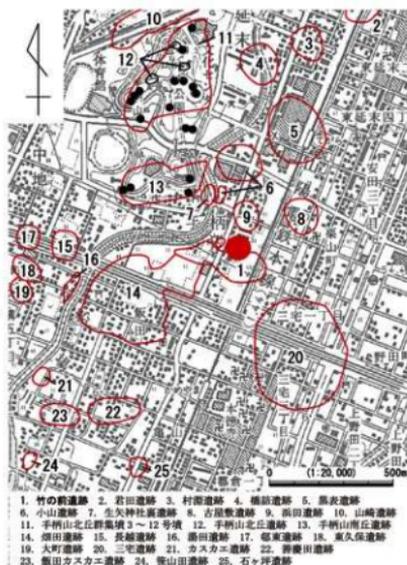


図1 遺跡の周辺環境



図2 調査地位図

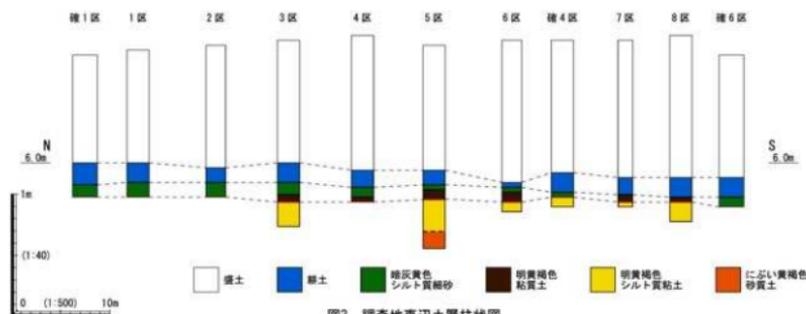


図3 調査地東辺土層柱状図

た。遺構の検出は基盤層の面でおこなった。検出した遺構は、溝、土坑、ピット等である(図4)。

1区(図6・写真1) 土坑3基(SK1~3)とピット6基を検出した。

SK1は南北1.5m以上、東西0.4m以上の規模をもち、検出面からの深さは15~30cmを測り一定しない。遺物は土師器皿(図5-1・2)、瓦器碗(図5-3)が出土した。1・2は手捏ねで、口径は1が8.6cm、2が12.8cmを測る。1は底部から屈曲して短く立ち上がり口縁端部は丸くおさめる。2は底部から緩やかに立ち上がり口縁部はヨコナデによりやや外反し、端部は丸くおさめる。3は口径13.5cmを測る。扁平化が進んだ形態で、口縁部はヨコナデにより僅かに外反し端部を丸くおさめる。体部内面のヘラミガキの間隔は広く口縁部に平行せず斜めに施される。外面にヘラミガキは観察されない。和泉型の13世紀前半から中頃(森島編年Ⅲ・3期又はⅣ・1期)に相当するとみられる(註1)。

SK2から土師器皿(図5-4)、須恵器碗(図5-5)が出土した。4は手捏ねで口径は7.6cmを測る。底部から内湾しながら短く立ち上がり口縁端部は上向き気味に丸くおさめる。5は口径16.1cmを測る。直線的な体部をもち口縁端部は丸くおさめる。端部外面に重ね焼きの痕跡がみられる。胎土には黒色の粒子が目立つ。11世紀末から12世紀代の年代観が与えられる(註2)。

SK3から須恵器碗(図5-6)が出土した。口径13.6cmを測る。体部は直線的で端部はやや肥厚し丸くおさめる。灰白色を呈し軟質で胎土もやや粗く、全体的に粗雑な印象を受ける。

ピットの埋土は灰黄褐色シルト質粘土であった。

2区(図6・写真2) 溝1条(SD1)、ピット7基を検出した。SD1は幅約45cmで、深さは12cm前後で底部に凹凸があり一定しない。埋土はにぶい黄褐色粘質土であり、遺物は出土しなかった。ピットの埋土はP11がにぶい黄褐色であった以外は灰黄褐色シルト質粘土であった。

3区(写真3) ピット3基を検出した。埋土はにぶい黄褐色シルト質細砂であった。

4区 明確な遺構及び遺物は検出されなかった。

5区 明確な遺構及び遺物は認められなかったが、西壁から南壁にかけて落ち込みを検出した。埋土はにぶい黄褐色シルト質粘土で地山ブロックを斑状に含んでいた。

6区(写真4) ピット3基を検出した。埋土は灰黄褐色を呈す。P15から図化には耐えなかったが、体部が内湾し口縁端部が外反する須恵器碗が出土した。10世紀前半から11世紀代の所産と思われる。

7区(写真5) 土坑1基を検出した。埋土はにぶい黄褐色シルト質粘土であり、遺物は出土しなかった。

8区 明確な遺構及び遺物は検出されなかった。

9区(写真6) 明確な遺構及び遺物は認められなかったが、北壁から南東端にかけて落ち込みを検出した。埋土は5区で検出したものと酷似していた。

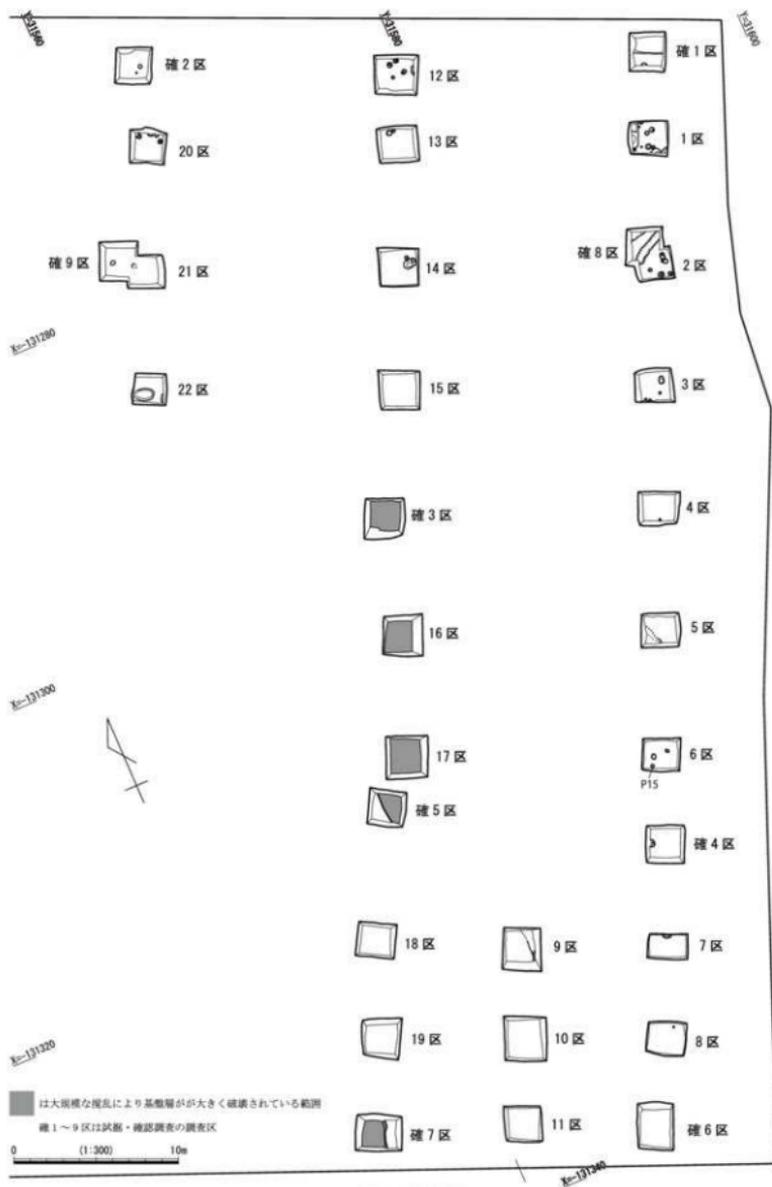


図4 遺構全体図

10区(写真7) 遺構及び遺物は検出されなかったが、明黄褐色粘質土と基盤層の間に約5~10cmのぶい黄褐色シルト質粘土が介在する。基盤層の検出高は標高5.7mを測る。

11区 明確な遺構及び遺物は検出されなかった。

12区(図6・写真8) ビット5基を検出した。P17から土師器皿(図5・7・8)が出土した。7・8は手捏ねで、口径は7が8.0cm、8が8.3cm、器高はともに1.6cmを測る。底部から内湾して短く立ち上がり口縁端部は丸くおさめる。P21から土師器皿(図5・9)が出土した、9は底部へラ切りで、底部から屈曲して短く立ち上がり口縁端部はやや尖り気味におさめる。口径9.4cm、器高1.7cmを測る。胎土はやや粗く、黒色の粒子が目立つ。ビットの埋土は灰黄褐色を呈す。

13区(写真9) ビット2基を検出した。埋土は灰黄褐色を呈す。

14区(写真10) ビット2基を検出した。埋土は北側のビットがぶい黄褐色で南側が灰黄褐色を呈す。

15区 明確な遺構及び遺物は検出されなかった。

16区 調査区全体が大規模な攪乱内に位置し、標高5.0mまで掘削したが基盤層を検出できなかった。

17区 調査区全体が大規模な攪乱内に位置し、標高4.7mまで掘削したが基盤層を検出できなかった。

18区 明確な遺構及び遺物は検出されなかった。

19区 明確な遺構及び遺物は検出されなかった。

20区(図6・写真11) ビット5基を検出した。埋土は灰色又は灰オリーブ色シルト質粘土であった。遺構検出中に弥生土器片が出土した。その胎土・焼成から弥生前期のものと思われる。

21区 明確な遺構及び遺物は検出されなかった。

22区(写真12) 暗灰黄色シルト質細砂と基盤層の間に灰褐色シルト質粘土が介在する。基盤層の検出高は標高5.7mを測る。中央部で灰褐色シルト質粘土の土坑状の落ち込みを検出した。深さ6cm前後で一定しない。この層から弥生土器壺又は甕の底部(図5-10)のほか、4条以上のヘラ描き沈線文を施した弥生前期の土器破片が出土した。

### 3. まとめ

今回の調査では、1~3・12~14・20・21区の北半部の調査区で平安後期から鎌倉前期のビットを中心とした遺構が検出されたが、逆にその分布域は南半部まで広がらない傾向が明らかになった。竹の前遺跡の既往の調査では、西方約150~200mの地点で3間×2間以上(35.0㎡以上)の総柱掘立柱建物及び11世紀後半から12世紀前半頃には機能していたとみられる溝(註3)、3間×5間以上(115.5㎡以上)の大型の総柱掘立柱建物(註4)などが検出されている。今回の調査で13世紀代の遺構がみつかったことは、古代末から中世前期における村落の動態を知るうえで貴重な成果を得たと考えられる。

註1 尾上実・森島康彦・近江俊秀 1995『瓦器編』『戦国 中世の土器・陶磁器』真岡社

註2 森内秀造 1995『相生堂址跡における平安期の遺物について』『相生市・緑ヶ丘堂址跡Ⅱ』兵庫県教育委員会、池田正史・服部寛 2003『まとめ』『相生市・緑ヶ丘堂址跡Ⅱ』兵庫県教育委員会、森田聡 1986『東播磨中世須恵器生産の成立と展開—神出古堂址跡を中心に—』『神戸市立博物館研究紀要』第3号 神戸市立博物館

註3 上田健太郎 2012『竹の前遺跡の遺構と遺物』『長崎遺跡Ⅱ』兵庫県教育委員会

註4 姫路市教育委員会 2015『竹の前遺跡・畑田遺跡発掘調査報告書』

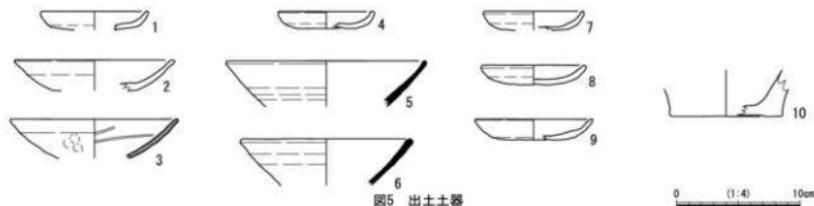


図5 出土土器

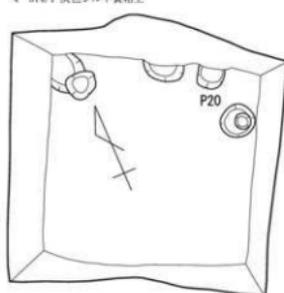
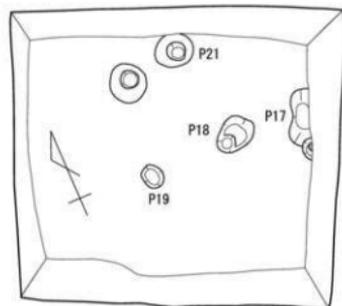
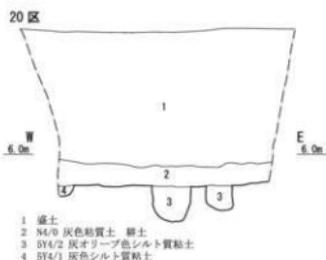
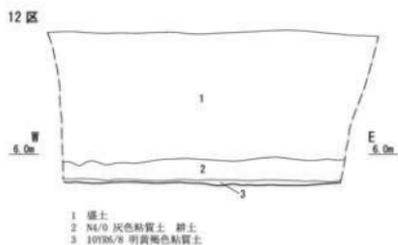
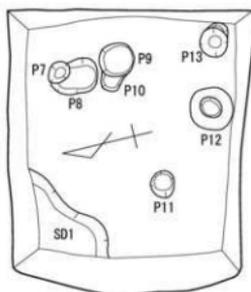
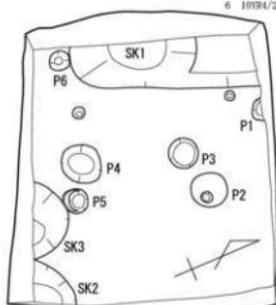
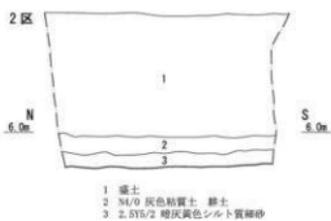
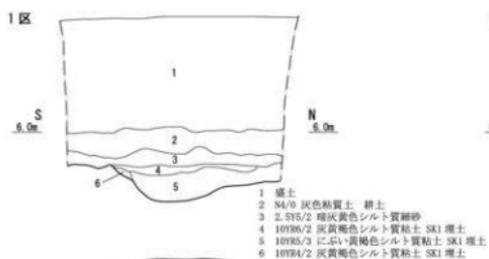


図6 1・2・12・20区 平・断面図

0 (1:40) 1m



写真1 1区(東から)



写真2 2区(南から)



写真3 3区(北から)



写真4 6区(南から)



写真5 7区(南から)



写真6 9区(東から)



写真7 10区(東から)



写真8 12区(北から)



写真9 13区 (南から)



写真10 14区 (南から)



写真11 20区 (南から)



写真12 22区 (北から)

## 報告書抄録

ふりがな	たけのまゑいせきはくつちょうきほうこくしょ							
書名	竹の前遺跡発掘調査報告書							
副書名	平成26年度 姫路市手柄字竹ノ前158番1地における発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第28集							
編著者名	南 憲和							
編著機関	姫路市埋蔵文化財センター							
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地 TEL (079) 252-3950							
発行年月日	2015年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たけのまゑいせき竹の前遺跡	ひょうごけんひめいてがら 兵庫県姫路市手柄 あざたけのまゑ 字竹ノ前158番1地	28201	020435	34度 48分 57秒	134度 40分 42秒	2014. 7. 17 ～ 2014. 7. 24	101.32㎡	店舗建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
竹の前遺跡	集落遺跡	平安・鎌倉時代	土坑、ピット	弥生土器・土師器・須恵器・瓦器				

- 本書は、姫路市手柄字竹ノ前158番1地で実施した竹の前遺跡発掘調査の報告書である。
- 調査は、N T T ファシリティーズからの委託を受け、姫路市教育委員会が実施した。
- 本発掘調査は、姫路市教育委員会埋蔵文化財センターの南憲和が担当した。
- 本書の執筆・編集は南憲和がおこなった。
- 調査に関する写真・図案等の調査記録、出土品は姫路市埋蔵文化財センターに保管している。広く活用された。
- 標高値は、東京湾平均海水準(T.P.)を基準としている。方位は世界測地系に準拠する平面直角座標系第V系の座標値を示す。
- 土層の色調は、農林水産省森林木材産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修「新版 標準土色図」に準拠した。
- 遺構は、原則的にアルファベットと数字を組み合わせた略号で表記した。略号はSD一箇、SK一土坑、P一柱穴・ピットをあらわす。

## 姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第28集

### 竹の前遺跡発掘調査報告書

—平成26年度 姫路市手柄字竹ノ前158番1地における発掘調査報告—

編集 姫路市埋蔵文化財センター

〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1

発行 姫路市教育委員会

〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地

発行日 平成27年(2015年)3月31日

印刷 松尾印刷株式会社